

## 都市の中の市大のブランド力とは何か

私は、市大の卒業生です。また、一人の府民としても、市大と府大の両大学の統合に反対です。市大の学生が始めた、NPO 法人「はぶちやり」が、テレビで放映され、週刊誌にも、取り上げられ、話題です。大阪に多い、ホームレス、今の日本の貧困を象徴するような人たちですが、彼らと、これも大阪で社会問題となっている、放置自転車の両方を、合わせて解決する一つの方法であり、市大が、唯一ホームレスの問題を取り上げた大学だから入学したという点は、全国的にも、教訓とすべきものではないでしょうか。市大のブランド力は、何も、ノーベル賞だけではなかったわけです。他にも、東日本大震災を受けて、「いのちを守る都市づくり」の課題を、分野横断的なプロジェクトチームが立ち上げ、課題を提起しています。南海トラフの巨大地震の発生は現実視されており、自然災害は防ぐことはできなくても、減災ならできるはずですが、これは、市大が、医学部を含め、文系・理系と、バランスよく、多くの学部から構成されている総合大学だからこそのものではないでしょうか。また、全国に視野を向ければ、3年ほど前には、市大の工学部の学生が、工業高校生向けの「電気基礎」の教科書を作成しました。文科省検定も、合格し、自費出版して配布したところ、北海道で、採択されたというニュースも、記憶に新しいところではないでしょうか。過去を振り返れば、大阪の公害問題にも、寄与しました。また、大阪という都市の中で考えてみると、阪神淡路大震災後、住みたくなる大阪とは、「都市格について」と、経済界の代表的な人からも、大阪の「都市格」が論じられました。その議論の中では、アメリカの大都市でも、都市の中心には、博物館や、大学があり、それらが、行政や市民と連携しながら、時として、企業も、目先の利益だけにはとらわれずに、「都市」の発展を都市ぐるみで考えてきたことが、紹介されています。しばしば、シリコンバレーが、取り上げられ、比較する人もいますが、突然できたものでしょうか。かつての、大阪の経済人たちは、大学をはじめとする「文化」を大変重要なものとして、位置づけている人もいました。大阪の発展の中に、文化や大学をどう位置付けていくのがいいのかということでしょうか。人には「人格」、会社には「社格」、都市には「都市格」があってもいいということでしょう。都市格を、一つの要素ではなく、経済力をはじめ、文化、景観、市民意識など、いろいろな要素から構成され、それぞれのレベルのトータルが、その概念とし、向上させたいと願ってきました。今は、高層ビルも立ち並んでいますが、中之島図書館をはじめ、由緒ある、伝統的な建物も、企業人・経済人から寄付もありました。大阪市にある二つの美術館の統合問題では、有識者会議の場で、統合して一つに統合しないとされました。二つにしたままなら、役割分担も可能ですし、それぞれの良さを、出し合えるからではないでしょうか。民主主義社会ですから、批判的精神の発揮も旺盛にあってしかるべきではないでしょうか。市大には、戦争中、商大事件がありました。明治憲法下での、戦時中の事件ですが、時の社会が、これでいいのだろうか、常に、批判的にみることの重要さを、教えてくれているのではないのでしょうか。かつての関一という市長は、都市計画なら、大阪の関に聞けと言われるまでになりました。関氏の論文などは、今読んでも、古さを感じさせないものがあります。先人たちの業績や、提言などが、どこかで生きている市大、そこにこそ、市大の市大としての魅力があるのではないのでしょうか。それこそが、誇るべき、市大のブランド力ではないでしょうか。